

# 炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏



## 第7話

若宮大路の横断を繰り返しているうちに、黄昏が鶴岡八幡宮の杜を影絵にしていた。

着到の挨拶廻りをするも、得宗(北条貞時)死去からまだ日も浅いとあってか、訪問先の引付衆・寄合衆の館はどこも主人不在だった。

―明日にするか―左右の供の者にそう言って、正遠は一の鳥居をくぐり現在の鎌倉駅附近に位置する下馬札前の馬場で待機していた自らの馬に乗った。屋敷のある梶原には源氏山のふもとを通り、佐介流・常盤流といった北条一門が館を構える路を辿るのだが、ふと思いついて、徒歩の者たちを先に帰し、由比ヶ浜方面へ馬首を向けた。側近の神宮寺正師、石川左門、柘植五郎が続く、正師は神宮寺(八尾市)の領主で正遠の従弟、左門は鶴岡八幡宮の勧請元である壺井八幡宮(羽曳野市)の権禰宜で典礼に明るく、五郎は楠木党と繋がり深い伊賀から派遣されて来ている。途中和田塚の森を横目に―瀧覚の父祖の霊社か―と呟きながら、雨後の道端に露出する“いつぞやの合戦で死んだ者たちの髑髏”という鎌倉の風物詩を思い出した。西日に灼かれる剥き出しの大仏を左手に拝しながら正遠一行は長谷に建つ館前で馬を降りた。山と海に

囲まれた鎌倉は、外敵の襲来に備えて七つの通路に北条一門を配しており、ここはその一つ「普恩寺流」の館である。当主・基時もとときが受領地ずりょうちである信濃から帰っていると聴き「一目だけ」と思いつき立ち寄った。玄関で立烏帽子姿の男児が片膝を付き出迎える。きょう最初に訪ねた内管領館ないかんれいでは、出て来た眉目秀麗な若造が「父は留守じゃ、わしも忙しい」と正遠の対応を後で見送る。家人と思しき者に顎で指図した。ほどなくして「おお楠木殿」と当主の基時が自ら出迎え、奥へと招き入れながら、侍女らに「なんぞ」と合図した。主殿に通された正遠一行に先ほどの男児が「北条仲時なかときです」と挨拶した。正遠はまだ元服前の次男・多聞丸より五歳以上は若いであろう仲時の佇まいたなずに感心しながら「もう十年ですか」と基時に語り掛けた。かれは「もうそないに」と感慨深げに頷く。その頃基時は京都にいた。後鳥羽上皇が「打倒・北条義時」を旗印に挙兵した承久の乱の後、朝廷及び西日本の御家人の監視を目的に設置された「六波羅探題ろくはらたんたい」。  
北方きたかたと南方みなみかたがあり、上級職である初代北方には義時の嫡男・泰時が就いた。基時は、泰時の弟で得宗家に次ぐ北条氏の名門・極楽寺流ごくらくじの祖となった重時の孫に当たる。基時も若くして「出世コース」である北方に就いた。その折に慣れない都暮らしを支えたのが正遠だった。以来立場は違えど親交が続いている。酒肴が運ばれて来た、仲時の酌を受けながら「もうそろそろですな、信濃守どの」と水を向けると基時は頭かぶりを振り「なったとしても高時たかときどのが成人するまでの中継ぎにござるよ、信濃守護も実質諏訪殿すわ。すべて御身内おみうちがなされる。あゝ」と突如気まぐすような顔で「楠木殿もじゃ」と苦笑いした。半刻余で館を辞した正遠らを門まで送りながら、「仲時が京にゆく折にはくれぐれもよしなに、御子息にもよろしく」と親子が頭を垂れる。  
小雨のなか大仏切通おさらいきしを抜け、梶原の館に戻った。この館は幕府草創期を支えた侍所別当・梶原景時かじわらかげときが建てた館で、当代随一の文化人でもあったかれの趣向が随所に活きている。が、景時が後に御家人らの弾劾によって一族郎党が肅清されて以来、館は鎌倉番の御家人らに貸し出されたものの、みな使用を憚はばかるので、正遠の祖父や父が少しずつ修繕を重ね自らの館としていた。小雨が止んだ離はなれの庭で風に当たっていると、柘植五郎がふいに現れ、かれの背後の影に黙礼した。立烏帽子姿の男の影が近付きながら囁ささやく

「弥四郎やしろう、久方ぶりじゃ：わしじゃ三郎じゃ」